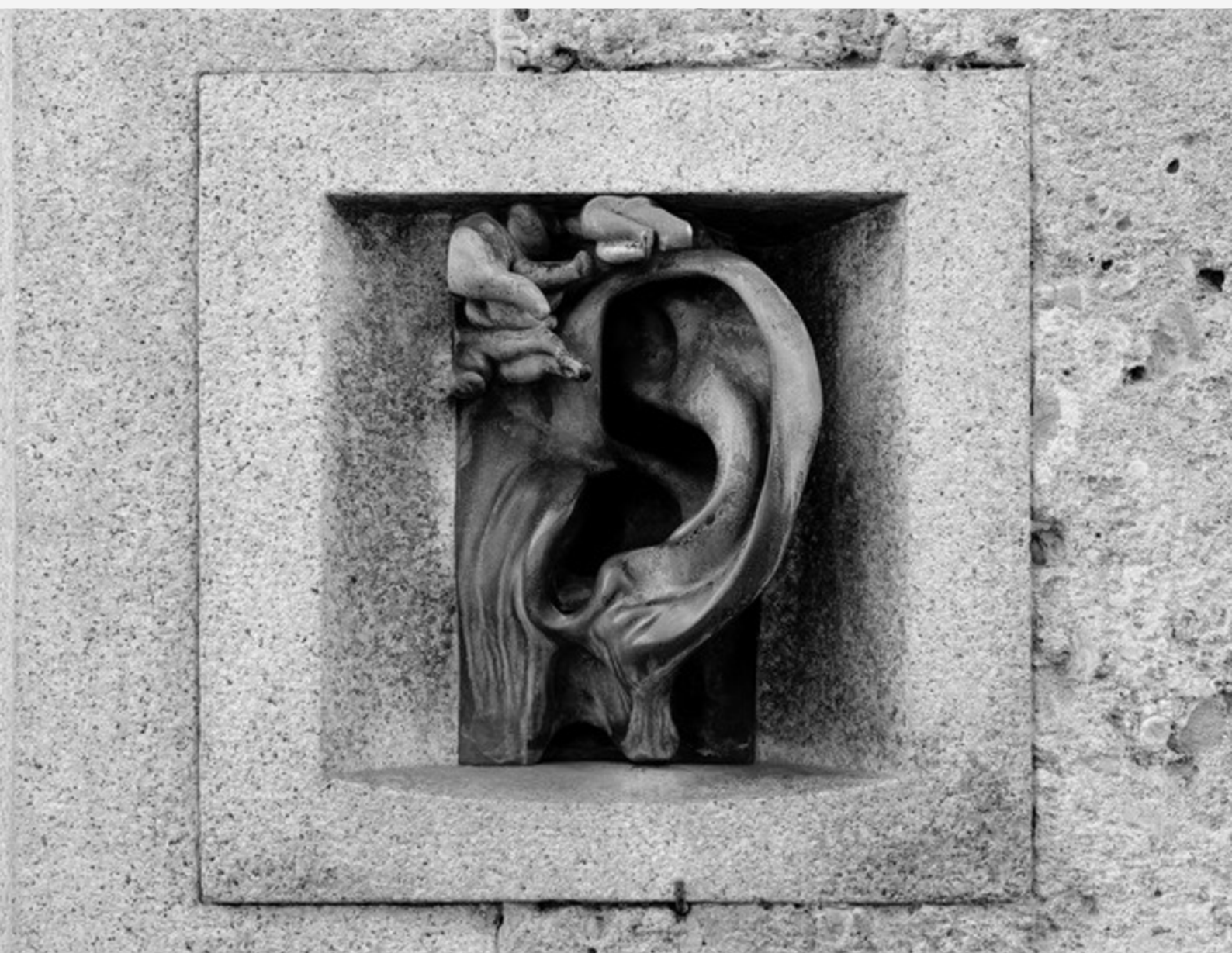




Casa Sola-Busca
Aldo Andreani - L'orecchio del
portinaio
via Serbelloni, 10-12 Milano

第19回 女子美ミラノ賞報告書

安次嶺 維理亜
Ashimine Iria

はじめに

女子美術大学が創立125周年という節目を迎える年に、伝統と革新が息づくイタリア・ミラノで研修の機会をいただきました。この貴重な機会を与えてくださった大村智名誉理事長、小倉文子学長をはじめとする大学関係者の皆様、ならびに現地で温かく支えてくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

本報告書では、1900年の創立以来、本学が掲げてきた「芸術による女性の自立」という理念を胸に、ブレラ国立美術学院での学びや現地での生活、そしてその経験を通して得た気づきについてまとめました。

プロフィール

あ し み ね い り あ

安次嶺 維理亜

2006年 女子美術大学短期大学部 卒業

2007年 女子美術大学短期大学部専攻科 修了

東京を拠点に活動するファッションジュエリーデザイナー、アーティスト。女子美術大学では建築と空間デザインを専攻し、デザインとアートの関係性について学ぶ。その後、デザイナーユニットötanaとしてアクセサリー制作のキャリアをスタート。2017年より、実名によるブランド「Iria Ashimine」を立ち上げ、ロンドンファッションウィークへの招聘をはじめ、国内外のファッション誌への掲載、アーティストや俳優への作品提供など、幅広く活動を展開してきた。常に変化し続ける自然界をモチーフに、一瞬の儚い美しさと、持続する自由な生命力の両方を表現するジュエリーを制作している。目に見えない身体の領域を拡張し、身につけるものを通して、今生きている世界との接点を生み出すという視点から、作品制作を行っている。

受賞歴

2020 Madame Figaro Paris 2020年注目デザイナー10人に選出

2009 第2回VOLVO アートデザインコンペ 受賞「element」（卒業制作）

展示

2021 パリファッションウィークfrontrowparis 出展

2019 ロンドンファッションウィーク公式出展

2019 ミラノファッションウィーク ブレラ地区でLone Design Club出展

2018 ロンドンファッションウィーク公式出展

2018 ユナイテッドアローズ都内数店舗にてPOPUP

2017 新宿・大阪伊勢丹POPUP

ミラノ滞在の動機・目的

ミラノ滞在とブレラ国立美術学院での学びを通し、作品の根源的な哲学である「身体拡張と偶然性」について、彫刻文化の視点から思考を深め、新たな素材や表現方法を研究するとともに、その可能性を模索したいと考えた。2017年、自身の名を冠したジュエリーブランドを立ち上げた直後から、VOGUE ITALIAをはじめとする欧州メディアへの作品掲載のオファーが増え、翌年にはロンドン・ファッションウィークから公式招待を受けて出展し、カミラ王妃と謁見するデザイナーにも選出された。その後、世界各地を巡り、ミラノやパリでも展示を開催した。作品は世界的に評価され、広く知られるようになる一方で、その反響の大きさとともに、日本を発端として数多くの模倣品が世に出回るようになった。私の作品は職人による手作業で制作していたが、型取りが容易であったため、製造コストの低い海外工場で大量生産され、消費される状況となった。新たな生産方法や素材を模索する中でコロナ禍にも直面し、立ち止まる時間を得た。その結果、ブランド拡大という方向ではなく、自身の手仕事による一点物やアートピースとしての作品制作へと方向転換することを決めた。これまでジュエリーや彫刻を専門的に学んだ経験はないが、ミラノ滞在とブレラ国立美術学院での専門的・文化的な学びを通し、以下の制作および調査研究を行いたいと考えた。1.イタリア各地の美術館、博物館、遺跡を巡り、古典および現代の彫刻・彫像について調査する。2.彫刻文化の潮流から、身体とジュエリーの関係性について調査・研究する。3.新たな素材と表現方法を探究し、その可能性を模索する。4.彫刻という視点から、ジュエリーの領域を超えた表現による制作を行う。



スケジュール

月	
8	女子美創立125周年記念 卒業生・在学生海外交流会参加／「この世界に生きること」インタビュー参加 ブレラ絵画館、清水先生の解説ツアー参加／アーティストアトリエ訪問／農家さんのお宅訪問
9	ミラノのアパート入居／オリエンテーション参加／ファッションウィーク視察／シチリア視察
10	履修登録開始・学生証受取／ジュエリーウィーク視察／ジュエリー作家アトリエ 訪問／地域のイタリア語教室に参加開始／Fornace Curti見学
11	授業スタート／女性センターでの授業（英語・イタリア語）参加スタート／日本語学校でのお祭 りボランティア／アーティストアトリエ訪問
12	Gallerie d Italia見学／バーリ・マテーラ・アルベロベッロ・ボルツァーノ・ブレーシャ視察
1	アイスランド旅行／フィレンツェ・ボローニャ視察／アルマーニ追悼展・最後の晚餐・DUOMO屋上・ レオナルド・ダ・ヴィンチ記念国立科学技術博物館・アキッレ・カスティリオーニ財団・サン・ベルナ ルディーノ礼拝堂・ミラノ記念墓地見学
2	1 学期終了 ミラノコルティナオリンピック開始／ミラノ支部の皆さんと食事会
3	ミラノのアパート退去 スウェーデンに1 ヶ月滞在／アーティストアトリエ訪問
4	ミラノサローネ、デザインウィーク視察／アトリエに滞在、陶芸体験／ベルガモ視察／帰国

円とユーロの値動き

2025年8月から2026年4月にかけて、円・ユーロ相場は歴史的な円安・ユーロ高基調で推移。
2025年秋口に170円台前半から後半で推移し、年末にかけてさらに上昇。2026年3月から4月
にかけては186～187円台の高値圏で推移した。

アパートのようす



アパートから学校まではトラムを乗り継いで1時間弱の道のりでした。3番トラムの乗り場がアパートの目の前にあり、一本でDuomoまで行ける利便性が魅力でした。12番や14番に乗り換えたり、天気の良い日にはDuomoから15分ほど歩いて通学することもありました。オリンピックの準備やDuomo周辺の大規模な石畳工事の影響で、トラムやバスのルートが頻繁に変更されたり、冬頃にはトラムの脱線事故がいくつか発生し、緊張が走る場面もありました。ミラノ市内はバスやトラムが細かく運行しており、キックボードもアプリで手軽にレンタルできるため、移動にはとても便利な環境でした。周辺は移民も多く治安が良いとは言えないエリアでしたが、夜でも比較的人通りが多く遅い時間の帰宅でもその点は少し安心でした。



大通りに面しているため、昼夜問わず騒音が大きかったですが、近所の教会の1時間おきに響く鐘の音もいつしか慣れて、東京に帰るとあまりに静かで驚いたほどでした。大家さんが日本人なので困ったことや分からないことがあった際にすぐ相談できるのもとても安心でした。スーパーはEsselungaとPamがどちらも徒歩5分圏内にあり、また週末のメルカートで、日本ではなかなか見かけない食材を調達して料理することも新鮮で楽しかったです。Naviglio運河も近く朝の散歩や骨董市に出かけることもありました。

ブレラ国立美術学院について



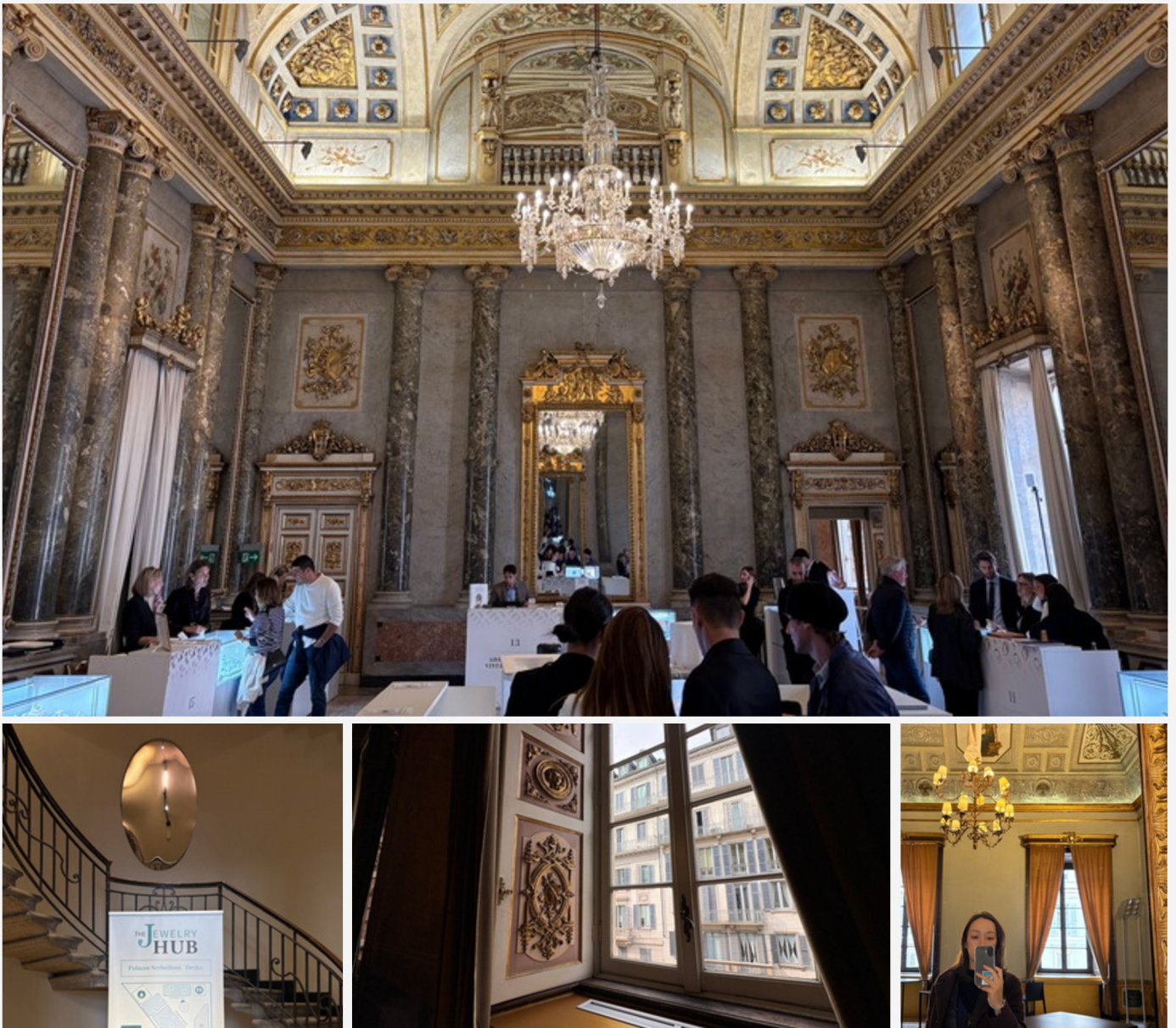
ブレラ国立美術学院は創立250周年を迎え、記念式典などが催されていました。また、映画『プラダを着た悪魔Ⅱ』の撮影がブレラ構内で行われた際には、正面の出入り口が封鎖されるなど、活気あふれる場面にも数多く遭遇しました。留学当初は、授業開始前の履修登録手続きに非常に苦労しました。各講義ごとにWhatsAppのグループチャットが存在し、連絡事項や情報交換が行われていましたが、授業開始後も日時や教室が突然変更されることが多く、しばらくは十分な情報を得られないまま右往左往する日々が続きました。しかし、授業開始から1週間ほど経った頃に、全講義のWhatsAppグループのリンク一覧が配布されたため、未加入だったグループを特定して参加することができました。こうした履修登録をはじめとする各種手続きにおいては、エリザベッタさんをはじめとする国際センターの職員の皆様や、ブレラで絵画技法を教えられている清水哲郎先生に大変お世話になりました。学生証の受け取り後は、併設されているブレラ絵画館を自由に鑑賞できるようになり、非常に有意義な時間となりました。校内はもともと修道院だった歴史的背景もあり、多数の壁画が残されているほか、限られた空間を2階建てに改築して活用する工夫も見られました。一方で、学生数の多さに加えてミラノ有数の観光名所でもあるため、常に人で溢れ返っており、講義によっては着席する場所すらない状況も生じていました。この環境改善に向けては、学生会が度々大学側へ改善要望を出している状況でした。

授業について



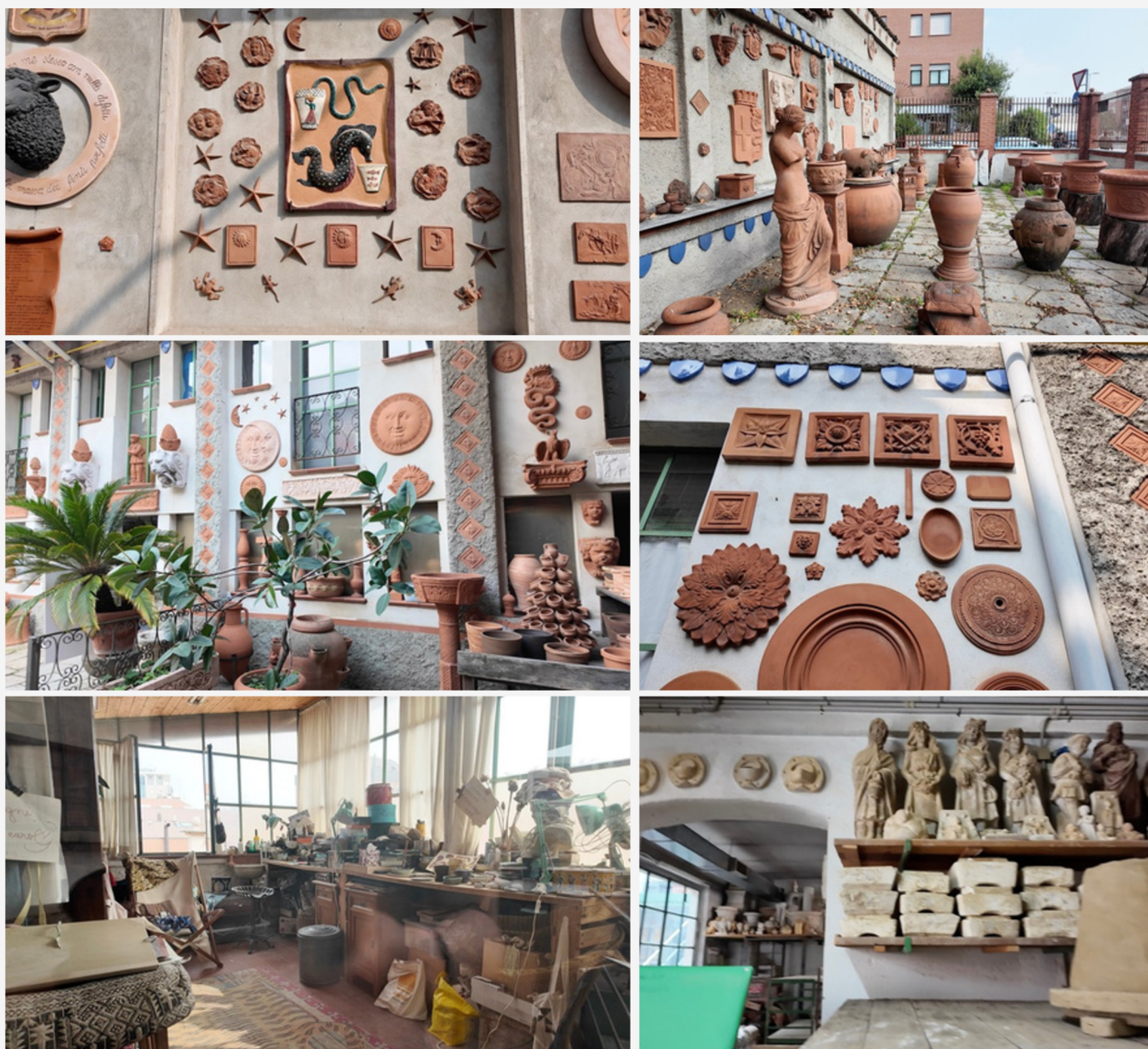
応募時点では、彫金などのジュエリー制作、特に素材についての学びを深めたいと考えていました。しかし、履修登録の段階で、前期には彫金やジュエリーデザインに関する講義がないことが判明しました。そこで清水先生とエリザベッタさんに相談し、彫刻やファッション、ファッション史、美学などの講義も視察したうえで、英語にも対応可能なGianpiero Moioli先生の彫刻の講義を選択しました。面談の際、先生がコンテンポラリージュエリーにも造詣が深く、過去にジュエリー制作を行う学生を指導した実績があると伺ったことが大きな決め手となりました。実際の授業は講義中心で、授業時間外に各自が自主的に制作を進める形式でした。しかし、校内に工房設備がないこともあり、当初希望していた学習内容との違いに悩みました。そこで、ブレラでジュエリーショップを経営されていた女子美の先輩でもある治子さんに相談したところアドバイスをいただき、ミラノでの限られた滞在時間は「アウトプット」ではなく「インプット」に深く集中する期間と捉え直すことにしました。講義内容は、古典的な彫刻にとどまらず、自然や建築的なインスタレーションの世界から、3Dプリンターや3Dソフトを活用したバーチャル空間での表現など最先端の手法まで、非常に多岐にわたるものでした。講義はすべてイタリア語で行われましたが、履修者の過半数が中国をはじめとする留学生であり、各自がAIによるリアルタイム翻訳などを活用しながら受講していました。さらに、Erasmusの枠組みを利用してイタリア語のクラスも履修しました。1回の授業が3時間以上と長時間に及ぶため、授業の合間には受講生同士でジェラートを食べに外出するなど、交流を深める機会にも恵まれました。講義を通して、素材や表現方法のみならず、コンセプトや制作哲学、そして自身の思考を言語化し客観視することの大切さを学びました。単に作品を形にするだけでなく、意図や背景をもって制作に向き合う重要性を再認識する貴重な機会となりました。ここで得た視点を今後の制作に活かし、より深みのある表現を追求していきたいと考えています。

ミラノジュエリーウィーク



ミラノ・ジュエリー・ウィークは、世界中のデザイナーやアーティストが集い、ファインジュエリーからコンテンポラリー作品まで、多種多様な表現が披露される国際的なイベントです。市内のギャラリーやパラッツォ（歴史的建造物）を会場に、展示やワークショップなど多彩なプログラムが展開されました。特に2025年は、「伝統的な彫金・金細工技術」と「ビジョナリーな最新表現やテクノロジー」との対話が大きなテーマとなっていました。視察を通じて、各国の作家による多様な素材解釈に加え、サステナビリティを意識した素材選択など、現代ジュエリーにおける新たなアプローチを数多く見学することができました。実験的な作品群に直接触れたことは、自身の制作における視点を広げ、素材と表現の可能性について深く再考する非常に貴重な機会となりました。

Fornace Curti



Fornace Curtiは、15世紀のイタリア・ルネサンス期から続く歴史あるテラコッタ工房です。10月に開催された年に一度の一般公開の機会に、訪問することができました。ミラノのドゥオーモ建築にもレンガや装飾タイルを供給した歴史を持ち、現在では伝統的な技法を継承するだけでなく、世界中のアーティストが滞在制作を行うアーティストレジデンスとしての役割も担う、創作拠点となっています。陶芸分野にとどまらず、ステンドグラスやペーパークラフト、絵画など、多様な分野の作家が活動しています。ジュエリー作家のCinziaさんのアトリエも見学することができ、彼女が金継ぎや和紙を用いたジュエリー制作を行っていることを知りました。何世紀にもわたり受け継がれてきた土というプリミティブな素材の表情や、職人の手仕事によって生み出される独特の質感を間近で見ることができ、素材が持つ可能性や質感表現について考察するうえで、大変深い刺激となりました。

地域のイタリア語クラス、女性センター、友人との出会い



近所にあったMunicipio（区役所のような行政施設）を訪れた際、掲示板に数多くの語学教室の案内が掲示されているのを見かけました。無料で参加できるクラスがあることを知り、日程の合う教室に通うことにしました。最初に参加したクラスは公園内の教室で開講されており、受講者の年齢層もさまざまでした。エジプトをはじめとする中東地域からの移民やペルー出身の方も多く、イタリア語を学びながら互いの文化や背景に触れる交流の機会となりました。日本でイタリア語検定5級を取得していたものの、実際の会話にはまだ不安があったため、このような実践的な学びの機会は非常に有意義でした。その後、ミラノ市が各区に設置・支援している女性のための地域拠点「ミラノ女性センター（Centro Milano Donna）」の語学教室にも参加しました。同センターでは、女性の社会参加や自立（エンパワーメント）を目的とした相談支援や交流活動が行われており、私もクリスマスパーティーや解説付きの美術館鑑賞ツアーなどに参加しました。女性同士が支え合う温かなコミュニティが築かれており、授業内でも家父長制やジェンダーについて議論する機会があるなど、語学を超えた学びを得ることができました。

そこで出会ったのが、エジプト出身で同年代のダウラさんです。彼女は4人の子どもを育てながら、ホームレスをはじめとする生活に困窮する人々へ自主的に食事を届ける活動を行っており、私も配布用のお弁当作りを手伝ったり、モスクでの食事会にも参加しました。彼女とそのご家族には留學生活を通して大変お世話になりました。異国での生活に不安や心細さを感じる時期にも、いつも自宅に招いて美味しい食事を振る舞ってくれ、彼女と過ごす温かな時間は私にとって大きな心の支えとなりました。

結び

今回のミラノ賞研修は、女子美術大学の創立125周年、ブレラ国立美術学院の創立250周年、そしてミラノ・コルティナ冬季オリンピックの開催とも重なり、大変活気に満ちた時期に滞在することができました。ミラノ到着後すぐに交流会に参加する機会をいただき、世界で活躍されている女子美の先輩方のお話を直接伺うことができたおかげで、素晴らしいスタートを切ることができました。また、日本では初の女性総理大臣が誕生し、イタリアでも女性首相が政権を担うなど、女性の社会進出やリーダーシップについての議論が、さまざまな場面でより活発になっていたように感じました。私自身もミラノの女性センターで現地のミラネーゼやムスリムの女性たちと日々を共にするなかで、女性の権利や生き方についてこれまで以上に考える機会を得ました。ブレラ国立美術学院では学生の8割が女性であると聞き、女性が芸術を学び、活躍する環境の広がりを実感しました。そのような中で、女子美術大学が長年にわたり女性の自立と芸術教育を支えてきたことの意義を改めて強く感じました。私も自分にできる形で女性同士が支え合うシスターフッドの輪を広げる一助となれればと思います。この報告書をまとめている最中、ミラノ到着直後に受けたインタビューの書籍化にあたり、その内容を確認する機会がありました。その中で、「この世界に生きることとは何ですか」という問いに対し、私は「すべてを味わうことです」と答えていました。その言葉を読み返したとき、ミラノ研修に向けた日本での準備期間や現地での生活には思いどおりにならないことも数多くありましたが、私はそのもどかしさも含めて、すべてを味わいたかったのだと改めて実感しました。滞在中「私は本当にジュエリーを作りたいのだろうか」と自問自答を繰り返していました。しかし、帰国直前にお世話になった陶芸家のお宅で、久しぶりに一人で土に触れる時間を過ごしたとき、理由もなく涙があふれました。不思議と心の深い部分が癒やされたような感覚に包まれ、自分が求めているのは特定の素材ではなく、手を動かすことで自然と自分が表現されるような創作そのものだったのだと深く納得しました。いつしか「売れるものを作らなければならない」という思いにとらわれ、その結果この数年は大好きだった制作そのものからも離れてしまっていました。この心の解放は研修で得た大きな気づきの一つです。帰国後は、新しいプロジェクトに向けて夢中でミシンを動かす日々を送っています。再びジュエリーを制作する日が来るかもしれませんし、別の表現へと進んでいくかもしれません。これからは、自分のインスピレーションに素直に従い、そのときの自分が本当に作りたいものを形にしていきたいと思っています。そして、自分自身に正直に生きることが、結果として社会や世界への恩返しにつながっていくと信じています。

最後になりましたが、旧友でもある古山さんをはじめ、ミラノ支部の皆様や現地で出会った多くの方々に支えていただき、心強く充実した研修期間を過ごすことができました。このような貴重な研修の機会を与えてくださった女子美術大学をはじめ、ご支援、ご指導くださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。